
君に咲く花

把 多摩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に咲く花

【Nコード】

N3644W

【作者名】

把 多摩子

【あらすじ】

娼館の前に捨てられ、そのまま娼婦になった美しい娘。立場が嫌なわけではないが、何か釈然としない日々。友人には恵まれていた、申し分ない居心地良い場所だった。一人の男が、自分を変える。そして訪れた転機は、幸か不幸か。

自ブログからの転載です。

港町カーツの娼婦

穏やかな日差し、今日は晴れ。

昨夜まで降り続いていた雨は、嘘のように消え去って、空には澄んだ碧が広がる。純白の雲が綿飴のようにふんわりと空に漂っている、そんな日の午後。

賑わう商店街の、とある高級服屋の前。

「さーっすが最近人気のラシェ様の洋服っ。きつれーいっ」

ウィンドウに張り付いて、ツインテールの少女が歓声を上げた。後ろで友人二人が、軽く苦笑いをする。通り行く人々が、不釣合いな様子に横を通り過ぎて行った。

誰でも知っている高級服屋と、少女。羨望するのは解るが”普通は”購入できない。

「まあでも、この服はエミイには似合わないんじゃないかな」

黒髪の少女がそっとエミイ、と呼ばれた少女の肩に手を置く。

唇を尖らせ、その手を振り払うエミイ。

「ガーベラなら、似合うけれどね。だってあの服は……」

黒髪の少女が後ろを振り返る。美女が、優雅に笑みを讃えて見つめていた。

ガーベラ。

ガーベラと呼ばれたのは金髪の少女。緩いウェーブ、腰ほどまでの見事な長髪、サファイヤのごとき瞳。うっすらと微笑むその姿は、誰でも魅入ってしまうような、存在感と容姿である。

今年で17歳なのだが大人びており少女の初々しさと女の色気を絶妙に醸し出していた。

「あらあらー、こんなところに娼婦が三人も？ 似つかわしくないから消えて欲しいですわーっ」

不意に三人は怪訝に眉を潜めると、声が聞こえたほうを見た。ラシェの店から三人の少女が出てくる。

宝石を身に纏い、くすくすと笑いながら人を見下すその態度から、身分が上であることが見て取れた。

最も、そんな高級服屋から袋を提げて見送られて出てきている時点で金持ちの娘だが。

「市長の娘・グランディーナよ」

黒髪の少女、ニキがガーベラに小声で告げる。小さくガーベラは頷いた。

「もう一度言うわねー？　ここはねえ、あなた達が来られるような場所じゃないのー。今をときめく大デザイナー・ラシェ様のお店なの。まあ、確かに、ラシェ様は美形ですし、見ているだけでうつとりしてしまいますけれど、だからといって、あなた方がお近づきになれるような人ではありませんのよー？　私たちのような上流階級の者でないと、せっかくの素敵なデザインが台無しなのですわー」
おーっほほほほ。

扇子を片手に高笑い、絵に描いたようなお嬢様である。思わず吹き出しそうになるガーベラ達だが機嫌を損ねると面倒なので、辛うじて堪えた。

傍らに控えていた御付きの少女が付け加える。彼女また、若干笑いというか呆れているように見て取れた。

立場仕方がないのだが、苦勞しているのねと寧ろガーベラが哀れむ。

「ラシェ様は確かに数年前まで上流階級のミセス達向けの衣装しかデザインされておりませんでした。ですが昨今、私たちの年代も着られる若々しく、華やかで、それでいてセクシーさも感じさせる、そんな衣装をデザインされるようになったのです。憧れるのも無理はありませんが。所詮あなた方は”娼婦”でしょう？　お金はあっても、似つかわしくないのですよ、ここの服は」

「でも、お店には『娼婦お断り』なんて書いてないわ」

エミイが笑いながらお嬢様・グランディーナを見やる。

その馬鹿にしたような態度がグランディーナには気に入らなかつ

たらしく、御付きの二人に顎で合図すると早々に立ち去っていった。
「ああ、汚らわしい汚らわしい。同じ空気を吸うのも耐えられませ
んわ」

喧嘩上等、そのまま同じ言葉返すよっ。エミイは忌々しそうに唇
を噛み締めた。溜息を吐くニキ。

「ほっときなよ、エミイ。私たちが娼婦なのは間違いないし。お嬢
様から見たら、私達の職なんて理解出来ないわ」

「でもさあ、ムカつくじゃん！　そもそも、あのウィンドウの洋服
は」

ガーベラ、エミイ、ニキは再度、ウィンドウの洋服を見た。

深紅の身体にフィットするデザインのロングドレス。かといって、
品良く適度な露出の為、着てみると思ったより派手ではない。

「あの洋服、ガーベラを想ってデザインされたものなんですよ」

港街・カーツの娼館”マリーゴールド”。

人が行き来する港町には酒場やら娼館が多く、数々の店が立ち並
んでいるのだが、マリーゴールドは中でも人気店である。

娼婦の質、部屋の清掃、内装、どれをとっても一級品だ。

そのマリーゴールドで、現在トップに君臨している者がガーベラ
であった。

16年前、マリーゴールドの前の花壇に捨てられていたのがガー
ベラである。

薄い布一枚で、他に何も所持しているものはなく、ただ、当時そ
の花壇で咲き誇っていたガーベラの中に捨てられていた。

それで名前が、ガーベラになったのだ。

娼婦になる為に幼い頃から、娼館で過ごした。初めて客をとった
のは11歳だ、それまでは部屋の清掃に食事、洗濯をしていた。

産まれた時からここに居たガーベラは、皆とも仲が良いし、妹と
して時に娘として可愛がられてきた。

美しいのだが、嫌味な態度も言葉も出さない。娼婦仲間から愛さ

れ、護られ育ってきた。

何れは看板を背負う娼婦になるだろうと期待もかけられていた、時折嫉んで嫌がらせをする娼婦も居たが、質の良い場所を目指している館の主人がそれを赦さず、ガーベラに限らず皆と親しく出来ない娼婦は即刻止めてもらっている。

この場所は、親のなかったガーベラにとって本当に天国のような場所だったのだ。

食事がありつけない人もいるのに、暖かなベッドと三食の食事、気の合う仲間と居られてガーベラは自分を幸福だと思って居た。

「今日ね、あなたの娘さんに会ったわ。可愛らしい子ね」

今夜の客は他でもない、昼間遭遇したグランディーナの父親……つまり、市長である。

ガーベラの上顧客の一人だった。だから、グランディーナのことも知っていた。

グラスに酒を注ぐ。狼狽する市長は案の定、お決まりの台詞を吐いて来る。

「む、娘には」

「何も言っていないわよ、秘密厳守なの、この店は。誰がお客様かなんて、他言無用ですわ」

「な、なら良いのだが」

苦笑いしてグラスを差し出すガーベラ。力なく溜息を吐いた。

娘に知られていない、と解ると途端に上機嫌になり一気に酒を飲み干す市長。

笑いながら自分を抱き寄せるこの中年太りのこの男に、唇を噛む。褒美をやろう、と太腿を撫でられ耳元で囁かれた。褒美がしたくて秘密を死守したわけではない、それがここでは当然だからだ。

結構です、と控え目に呟き更にグラスに酒を注げば市長は隣に置いてある持ち歩いていた鞆から金を数枚取り出し、豊満なガーベラの胸の谷間に挿す。

悪趣味な中年である、それでもガーベラは愉快そうに小さく微笑んだ。

仕方ないのだ、仕事なのだから。　娼婦として生きる自分の、仕事なのだから。

自分の娘と同じ年頃の女を抱くのは……どうなのだろう。

その娘はまさか、昼間に罵声を浴びせた娼婦と自分の父親が繋がっているだなんて、夢にも思わないだろう。

気の毒になった。仕事だけれど。仕事でも。

……”男という存在”が好きにならない。

窓から外を見、月を仰ぐ。丸くて淡く光を放つ月が、物悲しそうにこちらを見た気がした。

この仕事が嫌いなわけではない。育ててくれた恩もある。別にやりたいことがあるわけでもない。

だから、ここに居る。生涯ずっと、娼婦として生きていく。

デザイナー・ラシェ

薔薇の香りが漂ってきた、ガーベラは苦笑するとソファから立ち上がり客を招き入れる。

「会いたかったよ、ボクの愛しの女神！　ああ、今日も美しい。創造意欲が沸いてくるよ」

大量の薔薇の花束と共に、部屋に入ってくるなり床に跪いて手の甲に口付けをする男。金髪碧眼、整った顔立ちの最近人気のデザイナー・ラシェである。

これといってガーベラはこの男に興味がない。が、上御客なので、笑顔で対応するしかない。

初めてここへ来た時は、洋服のデザインがマンネリ気味で、自信喪失しきっていた。友人の薦めで気分転換に足を運んだらしい、と聞いている。

そこでガーベラを一目見て気に入り、暇さえあれば通うようになった。

ガーベラに似合う洋服をデザインしていくうちに、若い世代にも人気のあるドレスが出来上がり、飛ぶように売れている。

ラシェにとって、ガーベラは商売道具の一つなのかもしれない。年配の女性向けのドレスが売りだったが、行き詰って方向転換して大当たりしたのだ。ラシェにとってはガーベラは自分を救った救世主でもある、今後手放したくない逸材だ。

「今日はこの間の雰囲気からこんなドレスをデザインしてね、作ってみた。受け取って欲しい」

「まあ、綺麗！　……いつも、本当に素晴らしいドレスをありがとうございます」

綺麗な紺碧の瞳を見開き驚きつつ、はにかんだ笑顔を浮かべたガーベラ。

ドレスも、高い薔薇も本当は要らない、けれど、笑顔で、御客の

望むように対応する。

「今回は、前回部屋に飾ってあった百合を着飾ったガーベラを想像して製作してみたのだけれど。どうだろう？」

自信有り気にソファに腰掛けながら、そう言って笑うラシエ。余程の自信作なのだろう。

純白のマーメイドドレス、新緑を思わせる緑の宝石が所々に散りばめられている。

布地もサテンの最高級、宝石とて、本来ならば服に縫い付けるよりもアクセサリーとして仕立てたほうが売れそうだ。

誰がこんなにも高そうなドレスを買うのだろう。ガーベラには理解が出来なかった。

自分用に毎回プレゼントされているのだが、ガーベラに与えてもおつりが来るほどドレスが売れている意味が解らない。

港町カーツは、貧困民とて少なくはなく路地裏へ行けば子供達が食事を強請ってくる。浮浪者とて薄暗い路地に身を潜めて、何かを耐えている。

その一方でこのような日常生活とは掛け離れたドレスを購入出来る者が数人、存在している。

所得に差が有り過ぎるのだ、ガーベラは悟られないように溜息を吐いた。ラシエとて高所得者であるが、例えば路頭に迷っている人に手を差し伸べた事はあるのだろうか？

働き口なら、多々ありそうなのに。

思いながら、ガーベラは虫唾が走った。自分とて時折路地裏の子供達にパンを与えているだけで、暖かな寝床も満足な食事も持っている。偽善ぶっていると言われるのは構わなかった、目の前のラシエと自分も同じである気がしていた。

「いつも、ありがとうございます、本当に。このような、高い物。早速着てみても良いかしら？」

震える声で、気を取り直して微笑む。

言うなり、ガーベラはゆっくりと背中を向けた。

……私は、娼婦だから。

唇嚙締め一呼吸置いて、軽く振り返るとラシェに視線を送った。
悩ましく、艶かしく、微笑を浮かべながら……私は、娼婦だと言
い聞かせながら。

「脱がして、下さる？」

「何もない宇宙の果て 何かを思い起こさせる

向こうで何かが叫ぶ 悲しみの旋律を奏でる

夢の中に落ちていく 光る湖畔闇に見つける

緑の杭に繋がれた私 現実を覆い隠したまま

薄闇押し寄せ 霧が心覆い 全て消えた

目覚めの時に 心晴れ渡り 現実を知る

そこに待つのは 生か死か」

何時の間にやら外は暗い、太陽は水平線の向こうに消えて行っ
たらしい。

ガーベラはそっとベッドから起き上がると、おぼろげに詠う。気
だるい身体に鞭を打つ、ラシャはまだ疲労から眠っていた。

そっと床につま先をつけ、静かにゆっくりと窓に近づき、星達が
顔を出し始めた夜の帳に向かって詠う。

微かに、窓を開けた。

ひんやりとした空気が部屋に流れ込み、何も身に纏っていなかつ
たガーベラは小さく震える。

美しい裸体が、暗闇にぼんやりと浮かんでいた。

「ガーベラ？」

不意に名前を呼ばれ、小さくガーベラは跳ね上がった。

ラシェが寒くて起きたらしく、シーツに包まりながらこちらを見
ている。窓を閉めようかと思った、自分も寒い。

「ああ、いいね、星の輝きを背に立つガーベラ。……そうだな、次
回の新作は宵闇のドレスだ。あ、動かないで、そのまま。思いつい
たデザインを書き留めたい」

「まあ……。ふふっ、ありがとうございます」

ラシヤは傍らの命の次に大事にしているという仕事鞆を引き寄せて、中から紙と筆記用具を取り出した。

ガーベラを見つめ、瞳を輝かせながら紙に鉛筆を走らせる。

真剣な表情だ、仕事に入っていた。

何かに取り組んでいる男の瞳を見ることは、ガーベラは好きだ。

真面目で一途だから。

例えばそれが、金儲け目当てに結局は繋がってしまうと解っている。

ラシエが衣服を作るのは、自分の好きでやりたいことなのか、それとも今の収入を維持するだけのものなのか、ガーベラには解らない。

それでも、夢中になれることは良い事なのだと思って居た。ガーベラは、夢中になれるものが、なかった。

思いながら冷えてきた足元を軽く摺り寄せる、ガーベラは震えていた、寒いから。

窓から直接入る空気に当てられ、足先が冷え、思わず肩を抱きすくめる。

だが、目の前の男は洋服のデザインにすでに心捕らわれており、ガーベラが震えていることに気が付かない。

静かに、気づかれないように窓を閉める。

「何か……詩を詠っていた？」

「ええ、はい。自分で……作ったものを」

「へえ、すごいね」

こちらに目を投げかけることはないが、話を振られるとは思わなかった。集中している時は極力静かに、邪魔にならないように毎回大人しくしている。

先程の詩を聴かれていたことにも驚いたが、そこに興味を持って貰えてガーベラは嬉しそうに微笑んだのだが、見ればラシエはすでに服を身に纏っている。

一刻も早く帰宅して、デザイン画を完成させたいのだろう。話を振っておいて、聞く気がないようだ。

おもちゃを見せられ、すぐさまそれを隠された子供のように。

泣きそうなほどの衝撃を受けてしまったことに、ガーベラは自嘲気味に笑う。

ラシェに気づかれないように俯いて笑ったのだが、こちらに最早関心はないようだ。

……興味がないのならば、聞かないで。

目の前でラシェは身なりを整え、鏡で乱れはないか確認すると、ガーベラに軽く会釈した。

「またね、幸運の女神様」

女神というのなら、ここまで来て軽く抱きしめて頂戴。

ガーベラは深々とお辞儀をしながら、唇を噛み締めた。

……だから、男は、嫌い、なの。

ドアが閉まる音を遠くで聞いた。

ゆっくりとガーベラは窓を再度開ける。冷たい空気は良い。思考回路を元に戻してくれるから。

「私は娼婦ガーベラよ。お客あつての商売なのよ。男が嫌いでも良いの。仕事さえ、上手くいけば」

一人きりになった部屋で、再び謡う。

物悲しく、謡う。

まさかその歌声を、天界に住む神の使者が見ていたとは当時のガーベラには思いもよらないことだった。

吟遊詩人・ルクルーゼ

数年前、一人の吟遊詩人がこの港街へやってきた。

結構名の知れた吟遊詩人だったらしい、ガーベラを始め娼婦達は知らなかったが。ただ、街が歓喜にあふれていたので存在を知った。

男は、非常に線の細い、女のような風貌だった。精密な銀の豎琴を持ち、細長い身体は折れてしまうのではないか、というほど頼りなく、それでも声は一級品。確かに顔立ちは整っていた、都会のお坊ちゃんのようにガーベラは興味を持たなかったが。

街に來た途端に引っ張りだこで、夜な夜な酒場を、宿を、貴族の宴を、毎晩毎晩渡り歩いた。昼間も公園で歌っていた、一体彼はいつ眠っているのだろう。

詩が、本当に好きなのだと思った。

そんな男が娼館にもやってきて、例の如くガーベラに目を留める。皆の羨望の眼差しを受けて苦笑しつつガーベラは、いつもの様に態度を変えず部屋に招き入れる。

「あの美声を耳元で聴けるなんて、素敵！ 彼はどんな声を出すのかしら、ガーベラ、思い切り奮発してよねっ」

小声で先輩に囁かれた、軽く困惑し微笑んだガーベラは皆が瞳を光り輝かせている様子に多少怖気づいていた。代わりたいたすら、思っていた。

ガーベラには全く興味が湧かない相手だった、そんな有名人を相手にしたところで得に為らない。

会釈をして室内に來た吟遊詩人は、大事そうに豎琴をそっと壁に立てかけると直様衣服を脱いだ。話もせずに性急なこと、とガーベラが嘲笑する。無論、表情を見られないように深くお辞儀をしたまま。

顔を上げれば華奢だと思っていたのだが、無駄な筋肉のない、引き締まった綺麗な身体の吟遊詩人が立っていた。

「旅をしているとね、嫌でも筋肉が付くのですよ。何、物騒な世の中ですからね今は。魔王からの侵略の手とて緩んでいない。自分でも馬鹿だとは思いますが、何故危険な場所を行き来して、詩を歌うのだろう」

上半身だけ脱ぎ捨て、ガーベラに近寄ってきた。思わず後ずさったガーベラに優しく微笑するとそっと、手を取る。

ガーベラは、息を飲んだ。瞳は吸い込まれそうな濃紫、初めて見る黒とは違った妖艶な魅力の瞳に釘付けになる。眼力が強いのだろう、成程これではその辺りの少女ならばイチコロだろう……ガーベラはそう思った。

近くで見れば睫毛も長い、髪は董色で旅をしている割には美しく光り輝いている。見た目だけならば極上の青年だ、それは認めよう……。ガーベラは冷静に分析する、だが見た目が確かに良ければ飲む同業者もいるが、ガーベラは容姿は問題視していなかった。

客は、客。せめて一般的な礼儀がある男なら誰でも良い。

「美しい人、私はルクルーゼ。貴女様の名は、ガーベラとお聞きしました」

「ええ、美しい吟遊詩人様。いかにも私はガーベラです」
気取った芝居がかった口調に、ガーベラも合わせてみることにした。

「見事な金髪、大輪の花弁を見た目麗しく咲き誇らせている黄色のガーベラの花のようですね。」

黄色のガーベラの花言葉は”究極の愛と究極の美、されども親しみやすい”だったと把握しております。成程、その通りだったようですね。究極の愛と美を持ち合わせておいて親しみやすい、など無理な話だと思っておりましたが」

そう言って屈託のない笑顔で、子供のように笑う。思わず、ガーベラはこめかみがひくついた。

誉められているのだろうか？ どうにも気分が悪い。無邪気すぎるのか何なのか、対処に困った。

「そうですか？　そういったことを伝えてくださる方は初めてですわ」

「最も人気のある姫君を、と申し出たのです。成程確かに人気がありそうですね、なかなかお目にかかれない美女です」

姫君、という言い方にも胸がざわついた。娼婦の事をそう呼ぶ客もいるとは聞いていたが、何が姫なのだろう。確かに窮屈な部屋に閉じ込められている、という点では同じかもしれないが。姫の生活など知らないが、大事に箱の中で育てられているのだろう。

しかし、自分は姫君などではない。ただの捨て子の娼婦だ、誉め言葉が全て嫌味に聞こえた。

「おやめください、ルクルーゼ様。姫君などと、私はただの娼婦ですから」

謙遜し、控え目に言ったつもりだったが思いの外自分でも大声になっていた。ルクルーゼは細い瞳を軽く見開いている。

「……女性は皆、姫だよ。私はそう思う、だから姫君と呼んだ。別に娼婦の方々がを姫と呼んでいるわけではないよ」

肩を竦めてそう言うと思ったようにルクルーゼは小さく溜息を吐く、ガーベラは思わず顔を顰めた。

咄嗟にフォローされたのでは、と思った。客に無意味に気を使わせてしまったことを恥じたガーベラは、深く頭を下げると謝罪をする。

「申し訳御座いけません、不快な思いをさせてしまいました。私ではなく、誰か代わりの者を」

「いや、君が良い」

正直、ルクルーゼと語っていると妙に疲れる気がしたガーベラはこれ以上の粗相をしない為にも誰かと交代を望んだ。皆にとって得な筈だった、この吟遊詩人の相手をしたい友人は大勢いる。

間なく断られ、啞然とガーベラはルクルーゼを見つめる。まさか『良い』と言われるとは思わなかった。

「……ガーベラ、少し私と話してみよう」

「お話ですか？」

話なら先程からしている、と口から出かけたが飲み込む。流石にこれ以上反論しても仕方がない、今はこの目の前の男との会話に専念することにする。

上半身裸で寒くなったのか、ルクルーゼはベッドに寝転がるとシートに身体を包む。ガーベラはそっと近寄った、これはすでに会話ではなく誘われているのではないだろうか。

「違うよ、ガーベラと会話するつもりなんだ。ただ、寒いから」

顔に出ていたのだろうか、苦笑されそう告げられた。軽く唇を突き出し、ガーベラは踵を返す。用意されているワインを湯で割り、手際よく飲み物を拵える。

「見事な手際のよさだね、食事も自分で作るのかい？ それともそれは営業かい？」

「……食事は稀に、普段は娼館で食事が用意されますから」

丁寧に両手でグラスを差し出す、ゆっくりと起き上がったルクルーゼはそれを有難く戴いた。

「うん、丁度良い割合だね。飲みやすいし温まる、適温だ」

「それはよかったです」

全て飲み干したルクルーゼは、静かにガーベラの手を取った。結局酒が入り、ベッドがあり、女が横にいればこうなるのだ、とガーベラは思った。

会話なんて、していない。

「ガーベラの手は、冷たいね。そんな寒そうなドレスを身に纏っているからだよ。何かローブでも羽織れば？」

平素はすぐに寝台に入るため、そんなもの必要なかった。ので、薄着だ。

「特に寒くありませんから、大丈夫ですわ」

「でも、女性は冷えてはいけないよ？ 赤ちゃんを産む大事な身体だ」

言うなり、ガーベラを引き寄せるとそのまま包み込むように抱き

締める。シートに二人して包まるように、横になる。

「あらあら、お上手な口説き文句ですこと」

深く溜息を吐き、ガーベラは身動きしづらい男の腕の中で軽く悪態をつく。が、やはりルクルーゼは笑うばかりだ。

「口説き文句にとれる？」

「ええ、娼館の女に”赤ちゃん”だなんて。そこらの女には口説き文句でも、私達にとっては嫌味同然ですけど」

抱き締めているだけで何もしてこないルクルーゼ、会話が進むほど、妙に苛立つ。この男は何をする為にここに来ているのだろう、さっさと抱いて帰ればいいのに。

ガーベラはそう思い、後で皆に叱咤されようが思った事を口にしてみることにした。普段なら、懸命に堪えるのだが。もとより、客とは個人的に会話しないが。

「娼婦だろうが、女は女だ。先程も言っただろう、女性は皆姫君だと。ガーベラは赤ちゃんが産めない身体かい？ それならば謝罪する、けれども違うのならばこの先赤ちゃんを産む未来だってあるだろう？ 私は当然の事を言っただけだ」

「あらあら、そうね、素敵な王子様が来てくださってここから連れ出してくだされば。……そうね、可能性はありますわね。ごめんなさい」

そんな可能性、あるような、ないような。

話は何度か実際あった、ガーベラを個人的に独占したいと金を積む男達がいた。が、断った。

どのみち、ここから出て連れ出されたところで別の場所に囲われるだけだった。

”妻”としてではなく”愛人”として、別の館に移されるだけである。

ここ以上にそれは窮屈な話だ、好きでもない男に一生身を捧げるくらいならば、この場所で気の知れた仲間達と共に居たい。

店側もガーベラがいなくなっては痛手だった為断り続けていた、

大金は魅力的だったがそれでも利益を考えると手元にガーベラを置いておいたほうが上だったのだ。

「ようやく遠慮なく会話してくれるようになったね、うん、そのほうが私は嬉しい」

「は？」

嫌味を言ったら、爆笑された。ガーベラは呆けて、目の前で笑い続けるルクルーゼを見つめる。

頭を撫でられながら、まるで、子供をあやすように暖かな腕に包まれながら。

「実はね、ガーベラを見たのは今日が初めてではないのだよ。この港町に着いて二日目の早朝、出向いていた食事会が長引いてね、宿へ向かう途中でガーベラを見たんだ」

「え？」

早朝。

ガーベラは強くなった腕に包まれて、思わず硬直したが計算を始める。この吟遊詩人が街に来た日は何時だったか、それを思い出していた。

「ガーベラは、海に向かって詩を歌っていたね。とても心に残ったんだ、だから会いに来た」

「え？」

思わず、ガーベラは赤面した。顔から火が出るほど、恥ずかしかった。今まで誰にも言っていなかった自分の、秘密だったのだ。

そういえば数日前、早くに目が覚めて散歩に出かけたことを思い出す。

皆の為にとカボチャにトマト、ブロッコリーにベーコン、玉葱にエリンギを手早く刻み、小麦に卵、牛乳にチーズ、オリーブオイルとを良く混ぜ合わせた。それを薄く油を塗った大きな鍋に入れて蒸すように焼く、それを準備してから館を出たのだ。

戻る頃には野菜たっぷり栄養満点のパンケーキが出来上がっている、それに紅茶で朝食にしようと。

館には家政婦のような手伝い人がいるが、交代制で食事は作る。今日はガーベラと同室の仲間の当番日だった。

軽くストールを羽織り、海岸を歩きながら言葉を呟いていた。

朝日が昇る海は美しく、何か言葉を紡ぎたくなる。

漣の音、幾重に折り重なり音を奏でる。ガーベラは瞳を閉じて、数分そこで歌っていた。

詩など、あまり知らないのと思うままに言葉を綴っていただけだったが。

そこをどうやらルクルーゼに聞かれていたらしい、ガーベラは腕の中で小さく震え出す。

「太陽の光を受けて輝く金髪、横顔が美しかった。名を尋ねるのも忘れて私は、ガーベラを見ていた。何処かの歌姫だと思ったので、探し回ったけれどもいない。やがて小耳に挟んだ噂は飛び切りの美女がいる娼館だった、そこで私はここへ来て言ったのだよ。」

『美しい声の歌姫を』と。……するとどうだろう、『当店の女達は皆美しく魅惑的な声で囁くように鳴きます』と、返答だ。そうではなくて、私と同じ様に『詩を奏でる女性だよ』と告げたらば皆、首を傾げる。ガーベラ、何故人前で歌わない？ 勿体無い声だ」

「……………」

黙って聞いていたガーベラは、何も答えず沈黙したままだ。ルクルーゼは変わらず頭を撫でながら続ける。

「思い切って、全員を呼んでもらったんだよ。そうして、見事な金髪のある歌姫ガーベラに出会えた」

「……あれは、貴方が知っている詩ではないわ。ただの娼婦の独り言」

詩ではない。詩など、昔子守唄代わりに先輩の娼婦が歌ってくれたものしか知らない。

稀に楽師が街へ来て演奏してくれたが、それも遠巻きに見ていただけだ。

「詩は、心が紡ぐ。心を言葉に託して、声に出して奏でる。誰しも

が持っているものだ、何故隠すのか」

「詩など歌えても、娼婦は……」

「ガーベラは娼婦だけれど、それ以前に一人の女性で一人の人間だ。歌うことを誰も止めないよ？　少なくとも私はガーベラの詩が聴きたい、歌っておくれ」

娼婦・ガーベラ

沈黙しているガーベラの背中を、そっとルクルーゼは擦ったまま。もはや、何分が経過したのだろうか。

この男、まさか朝までずっと歌うのを待つつもりなのだろうか？
ガーベラは呆れ返って小さく溜息を吐いた、馬鹿げた男だと思った、今までで最低の客だ。

面白そうだから、このまま眠ってしまおうか。どう反応するだろう、興味が湧く。

と、そこまで考えてガーベラは眉を顰めた。自分らしくない反応だ、客に興味を持った記憶など一度もないのに。面白くなさそうに唇を尖らし、気持ちを入れ変えるように息を吸う。

繊細な指だが、腕は逞しく何故か抱き締めてもらうと落ち着く。

静かに瞳を閉じ、ガーベラは心地良い温度に身を委ねていた。

「っ」

慌てて眼を開く、落ち着いている場合ではない。見つめていたルクルーゼの瞳と視線が合い、気まずそうにガーベラは唇を噛む。

だが、ルクルーゼは微笑んだままだった。強要するわけでもなく、ただじっと抱き締めてくれているだけだった。

どうして、初対面の思考回路が意味不明な吟遊詩人に、こうして子供の様にあやされているのだろうか。港町カーツ、一番の娼婦であるこの私が。

自嘲気味に笑ったガーベラだが、なぜかこの腕を愛おしく感じてしまった。

「君の温もり 陽だまりの香 まどろむ中で 夢を見る 水に漂う泡の様に 消えそうで儚い泡の様に」

思わず、口走っていた。慌てて口元を押さえるが、見上げればルクルーゼは微笑している。

笑われるかと思った、頑なに抵抗していたのにこうしてすんなり

と言葉が出てしまったから。恥じて顔を背けたガーベラに、ルクルーゼは髪に口づける。

「貴女の温もり 大輪の花 咲き誇り香る 秘密の花園 光り輝く太陽の下 控え目に影で咲き続ける 太陽の恩恵から逃れるように 何故にそこで咲き誇る 貴女の香り 陽の香り」

まるで、返し歌。

先輩が読んでいた恋愛小説に、そのような文があったことを思い出した。敵同士の貴族の恋人達が、互いに詩で想いを語り合い、伝え合うという内容だ。

恋などしたことがない、得体の知れないものだ。恋に狂い、傷ついて自殺未遂をした先輩とて後輩とている。可哀想にと皆で慰めていた反面ガーベラはどこか客観的に見ていた、輪の中に入ることが出来なかった。

理解が出来なかったからだ、娼婦に恋愛など無用だと皆知っているのに何故、恋をするのか。

冷めた瞳で、皆と一線を引いて身を置くガーベラだからこそ、感情で紡ぐ詩など相応しくなくと思って居た。だから余計に恥ずかしかった、自分が歌う事は。

「木陰の冷たさ 水の冷たさ 眩しい光は痛過ぎる 熱い湯では耐えられない ひっそりとした森の奥 そこで咲く一輪の花 誰の眼に止まらなくとも そこで一人で咲いていた」

ぼそ、っと呟いた。

ああ、確かに歌う事は好きかも知れない。身体が軽くなる気がするから、宙に浮かんでいるような夢心地でいられるから。

けれども、自分だけの世界でありたい。誰にも踏み込まれたくない、干渉しないで欲しい。

自分の為に、歌う。ただ、自分を保つ為に歌う。これから、ずっとその筈だ。

「鬱蒼とした森の中 咲き誇っていた金色の花 寂しく儚くそれでも美しく 私の目に飛び込んできた 赦しておくれ 隣で歌うこと

を 赦しておくれ 領域に踏み込んだことを けれども願わせておくれ 花の為に歌うことを」

ルクルーゼは、徐に起き上がるとそっとガーベラの額に口づける。まるで花卉が触れたように優しく、甘く、柔らかく。

ベッドから軽やかに下りるとルクルーゼは豎琴を取り出して、見事な細工の美しい銀の豎琴だ。見慣れないガーベラでさえ、高級感溢れつつも手入れされ愛されていることが分かる豎琴だった。

手にした瞬間、ルクルーゼの笑顔が空気に溶けたような感覚になる。一心同体、とでも言うべきなのだろうか。魂の半身の様に、豎琴を丁重にしているのだろう。

娼館に、吟遊詩人の声が響き渡った。高音の豎琴と共鳴するような美しくも力強い声に、客も娼婦も皆聞き惚れる。

通りかかった人々が、思わず足を止めてその歌声と音色に酔いしれていた。

ガーベラは知っていた、その詩が自分の為だけに歌われていることに。気付いていた、困惑した。

何故、この男はそうも自分に詩を歌わせたがるのだろうか。

今し方、会話するように歌いあったではないか。それで良いではないか、なのに。

目の前で上半身裸の秀麗な吟遊詩人は、ガーベラを励ますように歌っている。何処かの神が降りて来て賛美歌でも奏でているようだ、別に神など信仰していないが。……そういう気分させられた。

詩を聴く事が、心地良いとは知らなかった。こうしてゆっくりベツドに横たわり聴いている余裕など、まして状況など今までなかった。

非常に優遇だ、高名な吟遊詩人をこうして独り占めしているのだから最高位の娼婦に、似つかわしい光景なのだと感謝した。自嘲気味に笑いつつ。

「ああ、金色の花よ なぜそうも卑屈になる？ 君の為に奏でているが 客として奏でているわけではないのに 森の中咲く金色の花

君はいとも容易く手折られて 風に揺られて折れそうだ 美しいけれど黒い霧で今にも見えなくなりそうだ こちらへおいで金色の花 一步踏み出して御覧」

「……あの、お客様。詩ではなくて普通に会話致しませんか？」

「私は客じゃない、ルクルーゼだよ。名前で呼んでくれないか、金色の花よ」

身体を起こし、不服そうに呟いたガーベラにおどけたように返すルクルーゼ。豎琴はしまわれることなく、奏でられている。

「それならば私として金色の花ではなくて、ガーベラという名前がありますわ」

「本名は？」

「……ですからガーベラです、私はガーベラ以外の何者でもありません」

ルクルーゼは語尾を強めたガーベラに、落ち着いた様子で瞳を投げかけた。鋭く真っ直ぐな視線に、思わず口を噤んでしまうガーベラ。

「そうなのか。では、金色の花に私が名前をつけよう。そうだな”ベラ”にしようか」

「は？」

にこやかに微笑むと、歌いだすルクルーゼに最早ガーベラは何も言えなかった。脱力感で再びベッドに横になると、瞳を閉じる。この男が何をしたいのか全く、意図が掴めなかった。

「ねえ、ベラ。私という時だけで良いんだ、ガーベラではなくてベラになってごらん」

「おっしゃる意味が解りかねます」

「賢い君なら、解っているだろうに。言わないといけないのかい？」

「私、学がありませんの。ずっとここにいますから」

「学の話じゃないよ、ベラ。娼館マリーゴールドという森に咲いている金色の花よ、花は一人では移動出来ないから私がそっと鉢に移し替えてあげよう」

「……移籍しろ、ということかしら？」

違うとは解っていたが、悪態ついてみた。

「そうだな、何処が良い？ 中央に公園があったね、あの花壇なんて良さそうだね。……助けなど借りなくても、いつしか金色の花は一人で種となって森の外へ出て行くだろうけれど」

小声でそう呟いたルクルーゼに、もうガーベラは何も反論しない。相手をするのに疲れていた。

「先程、君はあんなに伸び伸びと歌っていたのに。もう、止めてしまったのかい。残念だ、私はとても楽しかったよ」

「……………」

「ではせめて、君が眠るまで詩を歌おうか」

「……あなたは大金を払って私を抱きに來たのでしょうか？ 私はあなたの歌にお金など払わないわよ？」

「大金を払って、君に会いに來た。確かに魅力的な顔と身体をしているけれど、私が羨望するのは君の詩だよ。先程聴けた、もう、十分だ」

「変な吟遊詩人ね。芸術家は皆、頭のねじが取れているのかしら」

「はは、そうかもね。普通の男ならば薄布を纏い、魅惑的に横たわっている身体に眼が行くのだろうね」

遠慮せずに、ものが言えるので自然とガーベラはぽつぽつと言葉を吐き出していた。嫌味な言葉も、軽く受け流してくれるので、何故か安心出來た。

自分の感情を曝け出す事が苦手だが、教養がある人間ならば多数の言葉を知っているから容易く返事をくれると。上手く丸めて返してくれると、そう思えてきた。

「まあ、私も男だから君の艶やかな肌に興味がないわけでもないけれど」

冗談か本気か判らないが、突如そう言う。

皮肉っぽくガーベラは笑った、誘うように右手を伸ばした。

「あら、吟遊詩人様も男なのね」

「観ての通り、男ですよ。試してみる？」

ほうら御覧、やっぱりただの男だった。ガーベラは勝ち誇った、欲望に忠実な事は良い事だと思う。なんだかんだ言っても、結局は快楽を人は求めるものである。

ぽっかりと心に穴が空いたような気がした、風が胸を通り抜けた気がした。

娼婦としての魅力を満更でもなく発揮し、口を半開きにして誘う。艶やかに微笑めば男達は尻尾を振って、ベッドに入ってくるだろう。ルクルーゼは豎琴を大事そうに仕舞いこむと、近寄ってくる。急に冷めたガーベラは、自らドレスを脱ぎ捨てた。

面倒だった、早く部屋から追い出したい。一瞬でも心かき乱されたのだ、不愉快だった。

「困ったなあ、そんな激しい誘惑には私は慣れていないのだけれど」
「そうかしら、吟遊詩人さんならば引く手数多でしょう？ 甘い言葉で骨抜きにしてそうだわ」

私は、違うけれど。

そう、心の中で付け加える。

余裕の笑みでガーベラはそっと口付けをせがむように瞳を送る、ルクルーゼはそっと、顔を寄せた。

っん。

唇に、指。

驚いてガーベラは指を凝視する、ルクルーゼの人差し指が唇に触れている。

「私はね、互いに心を開いている相手ではないと口付けしない主義なのです。身体はともかく」

「……あらそう、たまにいるわよねそういう人」

ならば、”恋人ごっこ”は飛ばそう。ガーベラは自ら誘っておいで、跳ね除けられ羞恥心を感じていた。初めての屈辱だった。

「私は、君と口付けたい。けれど、君がまだ私に心を開いてくれないから出来ません」

口付けたいならすればいいのに、なんて面倒な男！

口から飛び出しかかったが、唇を尖らせる。表情を見てか、ルクルーゼが困惑気味に笑った。

「プライドを傷つけてしまいましたね、ですが、本当に気になる女性とは気軽に口付けしたくないのです」

言うなり、急に抱き締めた。シーツを被り暗闇でガーベラは息を飲む、力強い腕に再び絡めとられてうろたえていた。

耳元で、多少低音の背筋にぞくり、と来る声がする。

「よって、身体もです。娼婦ではない、君という一人の女性が私を求めてくれたら抱き合います。仕事ではなく、欲してくれたら……そうしたらば、私は金色の花のベラ、いえ、ガーベラ、貴女への想いを伝えるように本能の赴くままに抱き締めたい」

ルクルーゼは、動かなかった。

下半身に硬いものが当たっている、身体は正直だ。だが、ルクルーゼは何もしなかった。

暗闇で二人の吐息が響きあう、肌の温もりを感じながら微動だせず二人は抱き合っていた。

胸板とて厚く、男らしい。フェロモンだろうか、ガーベラはこの吟遊詩人を”味見”したくなった。

が、ここで折れては娼婦・ガーベラの名がすたる気がした。

唇を噛むと、堪える。

言葉など、脆くて儚く曖昧だ。ガーベラを敗北させたいが為に雇われた、どこぞの娼館の手先ではないかとすら思えてきた。

プライド高い、気高い娼婦は仕事以外で男と寝る事など談じてない。金にならない無駄な”運動”は、しない。

けれども、心かき乱される。

互いの心拍数が速くなっていた、ガーベラにも解っていた。欲望に忠実で、思考等気にしない生物ならば本能の赴くままにこのまま抱き合えただろうに。

この吟遊詩人はどうやって女を抱くのだろうか？ 手馴れている

ようだった。

あの声で名前を囁かれたら、夢心地なのだろう。綺麗な指は、豎琴を扱うように身体も扱ってくれるだろうか。

ここまで考えてガーベラは頬を紅く染めた、発情している自分を恥じた。

男が欲しいと思ったのは、初めてかもしれない。

けれども男は誘えばホイホイ身を投げ出した、誘わずとも押し倒された。

自分からどのようにせがめば良いのだろうか、小首傾げて「早く来て」と言えはいいのか。

言ったところで、この男には通用しない気がして踏みとどまる。

「……貴女の名前を呼びたいけれど、ガーベラと呼ぶと娼婦になる。ベラと呼ぶと気を悪くする。君？ 貴女？ 何と呼びましょうかね。

……身体から甘い香りがしています、鼻につく甘ったるい香りではなく通りすがった後の残り香の様に涼しげな香り。なるほど、男が夢中になる筈です。大層なことを言いましたが、私も朝まで耐えられるかどうか」

苦笑したルクルーゼの表情を見上げた、子供の様に半泣きで、それでいて大人の男が困惑していて。

思わずガーベラは腕を伸ばす、いい子いい子するように頭を撫でていた。

「愛とか、解らないし。吟遊詩人さんの想いなんて要らないけれど、確かに私もあなたの身体は魅力的だわ」

「光栄です、ね。ですが、身体よりも私自身に興味を持って欲しかった」

「身体だって、立派な貴方だと思うけれど」

「……今後も君に会いに来ていいでしょうか？ 嫌悪感を感じているでしょう私に」

「それは今からの貴方次第ですわ、吟遊詩人様。満足させてくださるのならば、喜んでドアを開きます」

「吟遊詩人ではなくて、ルクルーゼ、です」

むっとしたような声と共に、顎を？まれる。真っ直ぐに瞳を見つめ合えば、胸が弾んだ。

「名前を、呼んでください」

「……ルクルーゼ」

躊躇いがちに名前を呟いたガーベラは、迷子の子供のようだった。多少の恐怖は、自分のプライドなどこの男の前では意味を成さない事が解ってきたからだった。

ルクルーゼは、本当に唇を交わすことなく代わりに身体中に口付けてくれた。

それこそ、丁寧に。

「ルクルーゼ」

もう一度、ガーベラは名を呼んだ。

「……何故か張り詰めて、娼婦という枠に捕らわれている君。私の前だけでも、遠慮なく、君の感情を曝け出してください」

虚ろに、そんな声を聴いた。

「私は、娼婦という君ではなくて、あの日海に向かって歌っていたあの君が愛おしいのです」

詩歌い・ガーベラ

ルクルーゼは子守唄を歌ってくれた、聴いた事がないフレーズだがどこか遠く懐かしい曲調にガーベラはゆったりと瞳を閉じる。

変な男だ。

客など、会話もそこそこにすぐに身体を求めてくるものだったのに。

本当に、吟遊詩人として、歌声に引かれて館に出向いてくれたのだろうか？ もし、それが真実であるのならば非常に光榮な事だ。

高名な吟遊詩人が興味を持った歌声を持つ女……なんて魅力的な肩書きだろうか。

やがて朝日が差し込んだ、どうやら互いに眠ってしまったらしい。小さく欠伸をしてガーベラは起き上がると、隣で眠っているルクルーゼを見つめる。

一晩中抱き締めていてくれたようだ、ルクルーゼの右腕がガーベラの真下にある。

「ご宿泊料金よ、吟遊詩人さん。私、高いの」

小声でそう呟けば、微かにルクルーゼは微笑んだ気がした。

眠っているその頬にそっと手を滑らせる、暖かく柔らかな頬だ。

眉毛がピクリ、と動く。

暫しガーベラはその寝顔を見つめる、男の寝顔などどうでもよかったが、“可愛い”と思ってしまった不覚にも。

憎らしくて、頬をつまみあげると微かなうめき声。それでも起きて来ない。笑みを零しながらガーベラは暫し、ルクルーゼの反応で楽しんだ。

初めて与えられた玩具の様に、他愛もなく、触れる。自分が笑みを称えていた事に、気づくわけもなく。

やがてルクルーゼが目を醒ました、何処か判らないとでもいうように寝ぼけ眼でガーベラを見ている。

「おはようございます、吟遊詩人さん。朝食はいかがされます？」
「吟遊詩人じゃなくて、ルクルーゼ。言ったでしょう、私は名前で呼んで欲しい」

起きて早々ムス、と怪訝に眉を顰めたルクルーゼに、ガーベラは呆れて肩を竦める。

「はいはい、ではルクルーゼ様。朝食は」

「様、は要らない。ルク、でいいよ」

「……はいはい、ルク。朝食は」

「君がいいな、ガーベラ」

冗談なのか本気なのか、拍子抜けしたガーベラが振り返ると猫の様に瞳を光らせて、陽射しを浴びながら半裸のルクルーゼが微笑んでいる。

思わず、喉を鳴らした。多少ならずとも、心乱される光景だ。

「昨夜は寝てしまったしね」

「……お時間、大丈夫なのかしら？」

水差しからグラスに水を注ぎ、溜息混じりにルクルーゼにそれを手渡したガーベラはじっと、見つめる。

「時間？ 気にしないよ、好きなときに私は歌うから。今日は君と過ごす事にした」

「と、言われましても私は仕事がありますから」

食事当番でも、掃除当番でも今日はないが、客が来ない時間帯はゆっくりと眠りたいし部屋の模様替えもしたい。花も飾りたい、気晴らしに買い物にも出かけたい。

基本、この娼館は夜の営業だが常に誰かは滞在しているので昼間の利用も可能だった。昼のほうが都合が良い客だって、少なくともないのだから。

「私が金を出せば文句はないだろう？ 君を一週間、買うことにしたんだ」

「……は？ 酔狂ですこと」

悪態つくが、ルクルーゼは笑うばかりだ。昨夜の神秘的な雰囲気

は何処へ行ったのか、今朝のルクルーゼは粗野な雰囲気の少年に見えてきた。

もしかすると、今のこの雰囲気が吟遊詩人としてではなく、素顔のルクルーゼなのかもしれない。

「酔狂だよ、私は好きな事をしているだけだね」

そう言って屈託のない笑顔で、子供のように笑ったルクルーゼはようやくベッドから下りた。

「じゃあ、時間はあるし楽しみはとっておこうかな。我慢できなくなったら戴くけれど。とりあえず、パンとスープを胃に入れたいな店にあるかい？ それとも外に食へに行くかい？」

耳元で囁かれる。ガーベラは素っ気無く一歩後退すると、ローブを羽織って振り返った。

「その程度でしたら運びますわ。お待ちくださいませ」

部屋を出て、食事を取りに行く。

館の主人は上機嫌で金を数えているし、仲間達は瞳を輝かせて羨望の眼差しでガーベラを見つめていた。引き攣った笑みを浮かべて、差し障りなくガーベラは逃げる。

「よくやったぞ、ガーベラ！ 大金だ、一週間も！ はっはっは、今回の給料は凄いぞお」

普段金にそこまで貪欲さを見せない主人だが、気でも狂ったのではないか、というほど高笑いをしている。余程の料金が舞い込んだのだろう、吟遊詩人の羽振りのよさにガーベラは驚くばかりだ。

感謝など、しなかったが。

トレイに胡桃入りのパンと、根菜たっぷりのスープを二人分用意して運ぶ最中、仲間達も浮き足立った。

「一週間後に聞かせてよね、ガーベラ！ どんなんだったか」

「骨抜きにしてえ、色々買ってもらっちゃいなさいよ！ 街へ出向くといいわ、強請っちゃいなさい」

言いたい放題だ、苦笑してガーベラは部屋に戻った。

ルクルーゼは、窓際で外を見下ろしていた。ここからは海が見える、遠くに船が浮かんでいる。

「冷めないうちに、どうぞ召し上がれ」

「ああ、ありがとう。……うん、良い香りだね」

テーブルにトレイを置くと、直様ルクルーゼは近寄ってきた。パンを豪快に齧り、スープをすすする。

「出かけよう、ガーベラ。支度をして」

「はいはい、一週間あなたの気紛れに付き合いますわ。念のため言うっておきますけど、飽きても御代は返しませんから」

腹が減っていたので、ガーベラもパンを齧る。口に入れる前に香りが沸き立ち、それだけで脳が美味さを予感した。齧ってみて納得だ笑みが零れる、今日の当番は誰だったろう、非常に焼き加減も上手い。

「にしても、美味しいな。そこらの店より美味しいよ、ここの娼婦さん達は他に才能があるんだねえ、勿体無い」

それはガーベラも思っている、素朴な味だが深いし、飽きが来ない。もしかしたらこれを焼いた彼女は、パン屋を開いてみたいのかもしれない。だが、娼婦だ。

ワケありでこの場に居る仲間達だ、好きで居るわけではない。ただの娼婦が店から逃げ出して何処か遠くでパン屋をする……無理な話である。

ルクルーゼは何か思案しながらスープをすすっていたが、気にせずガーベラは適当に服を着替えた。動きやすい、普通の街娘のドレスだ。それでも華美だが、仕方がない。

「ガーベラ、行こうか」

身支度を整えれば、ルクルーゼも小奇麗に衣服を整えて笑みを浮かべて立っている。唇を尖らせると、ガーベラは微かに会釈をした。ドアを開ける、客を見送るように。

「さ、腕に？まって」

「は？」

右腕を差し出された、呆けていると更に突き出される。

「恋人の真似事だよ」

「……相手は選べませんか？」

「我慢しておくれ」

渋々ガーベラは腕に寄り添ってみた、初めてだった。部屋から出れば、興奮気味にあちらこちらからの視線を感じる。皆が隠れて見ているのだ、苦笑するしかない。ひそひそと黄色い声も聴こえる、羨ましいだの言っているが代わってもらいたいくらいだった。

げんなりとして歩くガーベラ、軽やかに手を振りながらルクルーゼは階段を下り、館を出て行く。出る際に、館の主人が勿論見送りに来ていたが何かを手渡している様子をガーベラは首を傾げてみた。また、金だろうか？ と溜息をつきながら。

「さて、定番の恋愛ごっこだ。まずは軽く散歩でも」

昼間から娼婦を連れて歩いて、この吟遊詩人は大丈夫なのだろうか？ 名を辱める行為ではないのだろうか？ とも思ったが大層機嫌が良いように見えるルクルーゼ、忠告する気すら起きない。

昼が近いので、街は賑わっている。ルクルーゼは公園の屋台で、ココナッツミルクを一つ注文した。二人でそれを飲んでみる。悪戯っぽく笑うルクルーゼに、引き攣った笑みを浮かべることしか出来ないガーベラだった。

「お次はランチだねえ、高級娼婦さんだけど今日は我慢しておくれ」
港に近い、魚臭い中央市場に連れて来られた。漁師達が獲物を持って帰ってきており、慌しく騒がしい。怒鳴り声が聞こえる、ガーベラは口元を押さえてあからさまに顔を顰めた。独特の生臭さ、濡れている足元、下卑た男達。全てが異質だ、高級なドレスではないが、汚したくはない。

港から程近い、掘建て小屋のような貧相な場所に歩かされた、中は酒を煽っている男達で溢れている。片隅の小さなテーブルに着席すると、大声でルクルーゼが叫ぶ。あまりのドスの聞いたような低音の声に大きく瞳を開いたガーベラだが、何故かルクルーゼは楽し

そうだ。上品そうな吟遊詩人の顔、狡猾なヤサ男、そして豪快な無骨な男のような振る舞い……一体、どれが本当の顔なのか。

「ココへ来てね、非常に美味しい魚に出逢った。一流のシェフでも出せないよ」

嬉しそうに料理を待つルクルーゼは、子供のようだ。見てみると意外すぎる一面が多すぎて、退屈はしない。直様運ばれてきた料理は、白身魚と貝類をトマトやオリーブとともに白ワインと水で煮込んだものだ。そこ僅かに小麦が入っている。香辛料の香りが強い、確かに食欲がそえられるものだ。

夢中で食べ始めたルクルーゼを真似て、ガーベラも一口食べてみた。成程、旨い。

眼を見開く、汚らしい店と無骨な男達からは想像も出来ない一級の味だ。それもそのはず、新鮮な魚介類を使った、漁師達だからこそ食べられる味である。友達同士では入りづらいが、目の前のルクルーゼに感謝したくなるほどの料理だった。

「美味しいだろう？」

「ええ、驚いたわ」

気がつけば、二人の皿は空になっていた。お礼にか、ルクルーゼは豎琴を取り出すと突如歌いだす。こんな粗野な男達に詩が解るのだろうか？　とも思ったが、内容は荒れ狂う海と戦う男達を詩った激しい曲だった。皆引き込まれて、聞き入っている。

なんとなく解った、歌いたいときに歌う、と言ったルクルーゼの心境が。

気持ち良さそうに歌っていた、金など出ないだろうに一流の吟遊詩人がこんな店だというのに。

知らず笑みを浮かべていたガーベラは、差し出された低俗なワインを、美味しそうに吞んでしまう。

こちらを見て、軽く片目を瞑ったルクルーゼにガーベラは諦めたように肩を竦めて笑う。

『楽しいだろう、ガーベラ。世間は狭いようでとても広いんだ』

そう、言われた気がした。

広場で豎琴を、教えてもらった。上手く出来なかったけれど。詩も、教えてもらった。思うことを言葉にすればいいのだと。広場の屋台で質素なパンを買い、齧りながら二人で過ごす。暗くなれば部屋に戻った。

それでも部屋で二人、寄り添いながら詩を紡ぐ。詩で、気持ちを伝え合う。

感性が豊かなのか、好奇心が旺盛なのか、子供のような仕草にもしかしたら惹かれてきているのかもしれない、とガーベラは思ったが口には出さなかった。本音、までも言わないが友人と同じ様に話してみれば思ったより冗談の通じる相手で、それでいて言葉は情熱的だ。

しかし、子犬のように甘えん坊で、猫のように計算高い。

その晩、二人は肌を重ねた。どちらが言い出すというわけでもなく、ごく自然に。

上手いのだが、そんなことはどうでもよかった。ガーベラ、と名を呼ぶ声を好きだと思った。そしてしっかりと瞳を見ながら動いてくれるルクルーゼが、とても嬉しく感じた。

初めて、朝が来なければいいのと思った。だが、朝が来ても結局二人は肌を重ねたまま。

二日目は夕方まで、互いに身体を貪っていた。

愛しい男？

飽きもせずに二人は時を過ごした、飽きるどころか時間が短く感じられ寝る間も惜しんだ。

熱心なルクルーゼの指導により、もとからの才能も引き出されてガーベラは豎琴の使い方を覚えていた。確かに覚束無い指先だが音は奏でられる、練習すれば直ぐに上手くなるさとルクルーゼに言われ軽く唇を尖らせながらもガーベラは頬を紅潮させた。

時折海岸に出て海に向かって言葉を紡ぐ。公園に行きベンチで通行人相手に言葉を贈る。森へ出向いて鳥達と共に唄う。

けれども吟遊新人は一箇所に留まる事はなかった、やがて旅立たなければならなかったのだ。

ガーベラはついいていきたいと思った、だが自分はこの街に捨てられ、この館の主人に拾われて命を繋いで貰った身、ドレスの裾を握り締めて旅立ちの挨拶に廻っているルクルーゼを見つめる事しかできない。

僅かに、期待していた。

もしかしたら、ルクルーゼが大金を払って自分をこの館から連れ出し一緒に吟遊詩人として世界を旅できるのではないかと。豪華で優雅な暮らしをしてきたが、必死に歩いても良いとガーベラは思っていた。けれどもルクルーゼは一言もそんなことを発しない。

別れを惜しんで様々な人が最後に歌を、とこの館を訪れた。ルクルーゼが歌う声は無論部屋に閉じ籠りのガーベラにも聴こえてきたが、部屋から出て声を聴く事はない。

「ガーベラ。明日私は旅立つよ、貴女も出航に来てくれるかい？」
「そうね、時間があればね。ルクとの契約期間も終わったから、客の相手をしなければ」

ようやく解放されて部屋に戻ってきたルクルーゼは、控え目に聴いてきたが上手くガーベラは感情を操作出来ずにぶっきらぼうにな

ってしまった。本当は、言われなくても見送りに行くつもりだった、むしろ連れて行つてと叫びたいくらいだった。

けれど、己の自制心と虚栄心が邪魔して言葉が出ない。

窓際に立って外を見下ろしているガーベラの肩をそっと抱くルクルーゼ、交わすようにガーベラはその場から離れる。ひらり、と蝶の様に。

「……どこの街へ行くの？ 次の街でも元気だね」

「次は……まだ決めていないけど、船で考えるよ。下船する場所なんてね、行き当たりばったりだからね」

残念そうに空になった自分の腕を見て、ルクルーゼは苦笑する。流石に今のは自分でも悪かったとガーベラは思ったが後悔しても自ら歩み寄る勇気がなかった。

気まずい沈黙が訪れる、指先をもじもじ、と動かしていたガーベラは不意に顔を上げて上ずった声を出した。

「お茶、飲む？」

「あ、ああ、そうだね」

「今日で最後だから、上等なお茶を煎れてあげるわ」

「……………」

言ってから顔を顰めたガーベラだが、前言撤回は出来ない。口元に軽く手を当ててそっとルクルーゼを見つめれば困ったように微笑していた。居た堪れなくなり、部屋を飛び出す。

唇を噛締め大股で館を歩き回り、高級な茶葉と湯を用意した。せめて、お茶だけでも完璧に煎れようと思い丁寧に注ぐ。

男にかき乱されるのは初めてだった、こうも別れが切なく感じられるのは何故だろう。もっと一緒に居たいと思ってしまったからだ。そんなことは解っている、だがどうにもならない。

暖かな茶器を両手で優しく携えて、ガーベラは重苦しい脚で階段を上った。また先ほどの様に気ままずくならないように、必死に気持ち落ち着かせながら。

部屋ではルクルーゼが豎琴を弾いていた、ドアを開ける瞬間から

微かに聞こえてくる。邪魔しないように、静かに入ったガーベラは手際よく茶を煎れてルクルーゼに差し出した。

優しく微笑み、豎琴を傍らに置くとルクルーゼはそれを口に含む。「ああ、良い香りだ」

味わうようにそれを何度も香りも確認しつつ飲み干すと、顔を背けていたガーベラの手を取った。

「おいで」

最後だもの、これで。

ガーベラは泣きそうになるのを必死で堪えてその手に引き寄せられ、胸へと抱かれた。温度を確かめる、香りを記憶する、癖を見つける。

けれど、ガーベラは聞き取る事が出来なかった。ベッドでまどろんでいるガーベラにルクルーゼは耳打ちしたのだ。「最後かどうかは、人生が終わってからしか解らないよ」と。

翌朝、華々しい出航だった。館の者達は手が空いている限り皆、ルクルーゼの御見送りに駆けつけた。無論ガーベラもそこにいる。溢れるくらいの人に見送られ、近寄る事すら出来ないが遠目で見ていた。

連れて行ってくれ、などとは言わない。言われる事もない、楽しいひと時だったと戯れようと思った。

やがて船の汽笛が聞こえてくる、潮風に乗って新たな風がやってくる。……出航の時間だ。

快晴だ、船出に丁度良い。祝福されているようにも思える、ポロン、と豎琴が鳴り響く。

娼婦達がガーベラの背を押した、最後に言葉を交わしておいでとの意味だが苦笑するとガーベラは唇をきゅ、と一文字に結び空を見上げる。ただの客だ、見送るだけで良い。

ルクルーゼとて何も言わずにガーベラの前から立ち去ろうとしている、栈橋を渡り乗船していた。

けれど。

「詠うといい、ガーベラ！ 君の思うままに」

ガーベラから近い位置に移動して大声でルクルーゼは叫ぶ、大きく手を振っている。詠うことは極力人目に曝け出したくなかったが、こうなつては仕方がない。出逢つた頃の様に冷たい無表情な、仕事の顔に戻つたガーベラは横を向いて一応返答をした。

「娼婦に詩は要らないわ」

「娼婦に詩は要らなくても、ガーベラという名の一人の女性に詩は要ると思うけれど」

船が出る。

いつまでも手を振っているルクルーゼに、微かにガーベラは手を振つた。遠くから聞こえる豎琴が、哀しくは泣く寧ろ励まされているようだった。だから若干、涙が瞳に浮かんた。

部屋に戻れば、見慣れない包みが置いてある。不審に思い手にとつてガーベラは布を開いて仰天した、見慣れた豎琴だった。ルクルーゼの豎琴で間違いはない、魔物との遭遇で傷がついた箇所があると見せてもらっていた。裏側には名前と彫つてある、先程手にしていた豎琴は新調したものだろう。

吟遊詩人が相棒の豎琴を手放すなど聞いたことがない、ガーベラは血相変えて豎琴を抱えると勢い良くドアを開いて廊下を駆け下りていた。

「おや、ガーベラ」

館の主人が来客と会話していたところへ、息を切らせて駆け込んだガーベラはようやく気まずそうに顔を赤らめたがそつと豎琴を差し出す。

「ルクルーゼ様の……忘れ物です」

首を傾げた主人は自慢の髭をそつと撫でると客に軽く会釈し、ソファから立ち上がるとガーベラに近寄つて耳打ちする。

「ガーベラへの贈り物だろう、どうするかはガーベラ次第だ」

「ですが、これは」

「この話はこれで終わりだ、今改築の商談で忙しくてね」

「改築？」

にっこりと悪意なき笑顔を浮かべた主人は優しく大きな手で、ガーベラの頭を撫でた。主人にとってガーベラは娘のようなものだ、娼館によつては主人によつて娼婦としての技術を教え込まれる時もあるがここは違う。全て先輩娼婦から習っている、主人との関係で疚しいことなど誰一人として、なかった。

誰かに衣服を引っ張られて、振り返れば先輩達だった。ガーベラは深く一礼をすると、静かにその場から離れていく。

「ルクルーゼ様からガーベラへの贈り物でしょう、大事になさい」

「……気の毒な人ね、自分の商売道具を他人に渡すなんて」

「ガーベラだから、でしょう。いい加減ルクルーゼ様のお気持ちを認めたら？」

怒気を含んだ先輩の言い方に、悪態づいていたガーベラの口が閉じる。深い溜息と共にす、っと先輩が指差した先は来客者だった。随分と身なりが良いが、何者か分からない。

「ルクルーゼ様が大金を置いていかれたのよ、ここに。それで娼館の一角で店を始めて欲しいのですって」

「……は？」

すっとんきょうな声を出したガーベラに、見知った娘が近寄ってきた。恥ずかしそうに俯いている。

「ルクルーゼ様が、この子のお店を出すようにお金を置いていったのよ..」

「……………」

「パンやスープが都会の一角でも通用できる味だから、って」

そこまで聴いて思い出した、ガーベラは弾かれたように彼女を見つめた。ルクルーゼに朝食代わりに出した、スープやパン、誉めたぎっていた。何か思案していたのはこの事だったのだろうか、娼婦でも他に何かをする権利があると言いたかったのだろうか。

「最初は人足がなさそうだけど、上手く行けば宣伝効果になるわよね。カフェなら若い男の子達だって気安いし、そこで私達が接客してちょーっと手をこまねいて見せたら客層が広がるものね」

啞然と、ガーベラは浮き足立っている目の前の娼婦仲間達を見つめていた。

職業に捕らわれずに、自分で進んでやってみたら良い……ルクルーゼの声が聞こえた気がした。思わず胸の豎琴を握り締める。だが、ガーベラには彼女がパンを焼くように、簡単には詠うことが出来なかった。

こうして喜ぶ皆の顔を見てみると、嬉しくはなるが胸に大きな穴が空いたままである。

一人静かに店を出たガーベラは、あてもなく街を彷徨った。だが脚は行きたい場所を確実に捉えており、そこへと運んでいく。うみねこが鳴いた、遠くでカラスも鳴いていた。

海岸に来ていた、潮風に当たりながら豎琴を抱き締める。弾こうと思えば、弾ける。だが、弾きたくない。何故ならば、弾く時その場に居た男がいないからだ。まだ、習いが途中だった。

「……………」
連れて行って、くれればよかったのに。別れの言葉も、ないなんて。

涙は出ない、だが、酷く虚しくて無気力で。ガーベラは夕陽が海に沈むまでそこに立ち尽くしたままだった。

「きみのこえ はるかとおく まっかにもえる まぶしきひかり
ひかりであなたがみえません」

豎琴は、クローゼットの奥深くに仕舞われたままになった。けれども大事に、貯めたお金で頑丈な宝箱を購入し、そこに丁重に仕舞っている。

あの吟遊詩人、名前はなんだったか。不意にガーベラは名前を呟いてみた。忘れた振りして覚えている、ただ、口に出したら負けた

様な気がして、言わないだけで。そう、心の奥では覚えている。

あの日以来、ほぼ毎日ガーベラは一人で海に向かって、思ったことを詩にする習慣が出来た。誰も知らない、ささやかな趣味のようなもの。吟遊詩人が旅立った方向へと、詩を詠う。今日のように、心寂しくなった日は、何処でも口ずさんでしまう。それでも豎琴は使わない。

宝箱に封じ込めましょう、貴方の香りと思い出を。

捨てても良い命

その日は朝から何か様子がおかしかった。

何がおかしいと言われると答えられないのだが、娼婦達は互いに顔を見合わせ合いながら、言い知れぬ『予感』に少なからず同様と焦りを覚える。

今日は曇り空で洗濯が乾かないわ、とまあ、日常的な会話をしつつ。そんな中、パンを齧りながらエミイは首を傾げて立ち上がった。

「行儀が悪いわよ、エミイ」

ニキに叱咤されるも、エミイは窓を凝視したまま歩き続ける。

「ねえ。なんであんなに鳥が大量に飛んでいるの？」

エミイの一言に娼婦達は弾かれた様に立ち上がり、皆窓に駆け寄った。

空が暗いと思っていたのは、雲で覆われていて陽の光が届かないからではない。

空を覆っているのは・・・大量の、鳥の群れ。

誰かが叫び声を上げた。

それを合図に皆半乱狂になり、自室に戻る者、館を飛び出す者、ただ叫ぶ者、騒然となる。

落ち着いて、みんな落ちついて！

誰かが叫ぶが声は届かない。

ガーベラは冷静に空を見ていた。夥しい量の鳥、間違いなく何かがある。

表も騒がしくなってきたようだ、一斉に何処かへ皆走っていく。

「どう思う、ニキ、エミィ」

「魔王は居なくなったのにね、世界は安定しないね」

のんびりと、慌てた様子もなくニキは答える。

スープを音を立てずに飲んでいた。

「私はここから出ないほうが良いと思う。津波はここまで来ないだろうし、他に考えられるのは、何？」

「皆でこうして居たほうが安全よね。私もそう思うわ」

二人は顔を見合わせ、軽く笑う。

落ち着いた者勝ちなのだ、何時、如何なる時も。

ガーベラが席に戻り、食事を再開しようとした時だった。表から怒鳴り声が聞こえてくる。

「みんなー！！ 市長の館へ避難だー！ 緊急避難だー！」

ガーベラとニキは顔を見合わせる。

さて、どうするか？ 行ったところで、館に全員逃げ込めるだろうか？

見ればエミィが何やら黒くて長い棒を持ち、窓から身を乗り出している。

名を呼ぶと、エミィは振り返りもせず手で二人を呼んだ。

「これね、商人に貰った望遠鏡なの。遠くが見えるんだよねーこれねえ。明らかに鳥じゃない生物が飛んできてるんだけど」

エミィは望遠鏡を二人に差し出した。

いつもの無邪気な笑顔はない。

顔が、声が引きつっていた。

ニキは強引に手から望遠鏡を& a m p; #25445;ぎ取ると、空を見やる。

何処に・・・？ 小さく声を漏らしたが、部屋に響くほど、大きな音で固唾を飲み込む。

顔を引きつらせながら、望遠鏡から瞳を外した。

「これはヤバイかもね。なんだろう、あれ。ドラゴン？ 一匹じゃないよね」

望遠鏡で見える距離は、一体どれくらいになるのか。

間違いなくこちらに向かってドラゴンは飛行している。

三人は、護身用のナイフを持ち、動きやすい服装と靴に履き替え、長い髪を邪魔にならないように結い上げると、連れ立って裏口から外へと飛び出した。

あんなものに体当たりされたら、娼館は一撃だろう。とりあえず、逃げるしかない、安全な場所が何処か分からないが。

「私のお客に、地下室を持ってる人がいる。そこ行ってみる？ 地下の方が安全じゃない？」

「生き埋めにならなきゃ、ね・・・。行くだけ行ってみようか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3644w/>

君に咲く花

2011年12月25日19時56分発行